

# 我去大理古城

9月半ばの某日

10月1日は中国の国家的祝日「国庆节」である。この日から1週間、全国が慶祝の休暇となる。日本でもよく知られている「中国版ゴールデンウィーク」である。

クラスの面々もそれぞれに過ごし方を考えている様子で、ベトナム人のラニさんはハノイへ1ヶ月ぶりの里帰りだという。昆明・ハノイは飛行機で3時間たらずの距離である。私はパッドさんから、古い街並が美しいといわれる「大理古城」へいっしょに行かないかと誘われた。大理古城にパイロン君の友人がいて、その人が民宿を始めるところだそうで、まだ未完成なのでベッドはあるもののシャワーはないが、ホテル代はタダだという話だった。

そこで、この美味しい話に乗って、大理古城を訪ねてみることにした。大理古城小旅行組はパッドさんとパイロン君、そしてアメリカ人のサマンサさんと私の4人である。パッドさんの発案で大混雑が始まる前に昆明を脱出することで衆議一決。出発は30日の午後と決まった。

9月30日(木)

午前中、王老師の「漢語総合」の授業に出席し、

午後、銭老師の「漢語閲読」は老師の承諾を得て欠席。いつも行く飯店で昼食に天津小包子を食しながら話はあれやこれやと尽きず、心はまだ見ぬ大理古城へ飛んでいた。

大理は昆明市内から西へ約400キロほどの距離にある。飛行機で1時間、汽車を利用すれば約6時間である。われわれは高速バスを使うことにした。約4時間半の旅程で、公営の長距離路線バスならば110元、旅行会社が運営する直行便ならば140元ほどである。市内の数力所にバスターミナルがあり、頻りに往來している便利さが市民にうけている。料金の差はバスにある。旅行会社のバスはスウェーデンのボルボが主流で、乗り心地の良さを売り物にしている。

バスの出発時刻は午後2時40分だった。西苑バスターミナルまで大学からバスで15分ほどなのだが、2時に出れば十分に間に合うと高をくくっていたのが最初の躓き。バスが来ない。ではタクシーにしよう、タクシーを捕まえようとするが、これまた捕まらない。一丁大街道を右往左往するうちに2時40分を過ぎてしまった。急遽、バスチケットを購入した旅行代理店へ駆け込み、便の変更を依頼。係員曰く、「ターミナルへ行け」と。

3時半過ぎ、ようやくのことタクシーを捕まえることができ、ターミナルに到着。既に大勢の人で混雑していた。早速、便の変更が可能か窓口へ向かう。あまりの人の多さに、中国語の堪能なパイロン君とサマンサさんの二人にそちらの方は任せ、私とパッドさんは建物の外で待つことにした。4時を少し回った頃、人出はますます増え、ターミナルは建物の内も外も大きな手荷物を抱えた人で溢れていた。既に帰省ラッシュは始まっていたのだ。

4時半を過ぎた頃、パイロン君とサマンサさんが戻ってきた。二人の話では切符売り場は大行列で、窓口にとどろき着くのに40分ほどの時間を要したという。電光掲示板に表示されている大理便が次々と満席になって行くのをハラハラしながら眺めていたとのことである。幸いにして、追加料金を支払うことで、最終便を確保することができた。9時発の寝台バスである。50元の追加料金は財布に少々痛かったが、前々から乗ってみたいと思っていたので、それもまたよし！ 好奇心がうずいてきた。

バスの発車時刻まで数時間の余裕があったので、ターミナルの側にあつた回廊料理の店で時間つぶしを兼ねて少し早い、雲南名物の「米饊(ミーセン)」で腹ごしらえ。時間が経つにつれて通りは人と車とバスが三つ巴、四つ巴に絡み合っている。先にと隙間に突っ込んでくるので、流れは完全にストップしてしまい、どこがどの車線なのかわからない。まさしくカオス状態である。

だが、不思議なものでしばらくすると動き出す。阿吽の呼吸とでもいうのだろうか、ミーセンの強い中国人も「譲る」ことを知っているようだ。ならば最初から車線を守ればいいのにも思うのだが、それは規則遵守の意識に感じられなくなった日本人故の思考であつて、カオスこそ生きる力の源なのかもしれない。カオスの中を地方へ向かう大型バスが次々とターミナルから出て行った。

8時過ぎ、大事を取って乗り場へ向かった。ターミナルの中は、足の踏み場のない程の混雑である。入り口を入れて左右と正面に乗車ゲートが設けられていて、その上部に電光掲示板で発車するバスの便数と行き先が表示されている。同時に、放送でも案内が流されるが、喧噪でほとんど聞こえない。そうこうしているうちに9時が近づいた。大理

行きのバス乗り場を探すが見つからない。係員に問うと、「2番ゲートだ」という。2番ゲートの電光掲示板にはなにも表示されていなかった。急いで2番ゲートへくぐるとすぐ前にずらりと大型バスが並び乗客が乗り込んでいた。だが今度は、われわれの乗る大理行きのバスが見当たらない。再度係員に問うと、バスは二重に停車していて1



深夜、煌煌と輝く月の下、大理古城はしんと静まり返っていた。1軒だけ開いていた屋台から串焼きの煙とともに香ばしい匂いが漂ってきた。

台のバスの陰になっていた。一瞬、乗り遅れたかとヒヤリとしたが、乗車口にとどろき着くと運転手は少々お冠だった。他の客は既に乗車しており、われわれを待っていたらしい。大理行きの寝台バスは45分遅れで出発した。

寝台バスは、左右の窓側に各1列、中央に2つの通路に挟まれて1列、各列とも上下2段式で上下ともに5人分のベッドが設けられていた。私のベッドは中央の列の上段の最前列だった。進行方向に足を向けて寝る。1人当たりのスペースは、左右が両肩幅に握りこぶし1個分程度の幅で、長さは足を十分に伸ばせる余裕があった。上半身を不用意に起こすと天井に頭をぶつける。カプセルホテルの個室よりもはるかに狭いが、どのみち夜道の旅である。横になれるだけで上等である。盗難に気がつけるといわれたので、財布はズボンのポケットに入れ、カメラバッグは顔の横に置いた。

西苑バスターミナルを出発して2時間程でトイレ休憩。車内は眠っていた。どの辺りなのかさっぱりわからないが、田舎の匂いがしつかりしたのが昆明市内ではないことは確かだった。15分程度の休憩の後、バスへ戻り、私はすぐにまた眠りに落ちた。再び目を覚ましたとき、そこは大理のバスターミナルだった。午前1時40分。ほぼ到着予定の時刻だった。初体験の寝台バスだったが、結構眠れるものである。

大理のバスターミナルから大理古城区へはタクシーで30分ほどの距離である。パイロン君の友人の指示に従い、タクシーを拾って古城区へ向かうことに。バスターミナルの入り口のシャッターは既に降ろされ、広場にはわれわれ4人だけとなった。最後の客待ちをしていたタクシーの運転手にパイロン君が交渉して料金を40元に値切った。

タクシーに乗り込み3車線の道路を快適に進むと、右手に夜目にもはつきと湖が見えた。「洱海(アーハイ)」である。自然湖で古来からこの一帯を潤す水資源もあり、観光の名所として知られている。しばらくして幹線道路から枝道にそれると、すぐに大きな石造りの城門が見えた。アーチ型の門の上に2層になった楼閣がのっている。まさに城門である。その城門をくぐると街並が一変した。瓦屋根の家屋が先まで続き、歩道は石畳。歩道には並木が植えられ、まるで映画の屋外セットのようである。暗闇の中でオレンジ色の街灯がかすかに通りを浮かび上がらせていた。

パイロン君の友人の指示に従い、人民路(レンミンル)と復興路(フウシャンル)の交差点でタクシーを降りた。辺りは真っ暗。少し離れたところに1軒だけ明かりが点いていた。パイロン君が携帯をかけるたびにパイロン君の友人のクバさんが現れた。明かりの点っていたのはクバさんが働いているバーで、閉店時間とどくに過ぎていたが、われわれの到着を待っていてくれたのだ。挨拶もそうそうに、宿へ案内してくれた。

人民路を東に少し下った民家が宿だった。クバさんが軽くノックをすると内側から扉が開き、金髪の縮れ毛が肩まで伸びた、髭もじやらの男性が口に入差し指を当てて「シー」と目配せをくれた。中に入れてくれた。暗闇の中だったのでよく見えなかったが、どうやらバーのようだった。髭もじやらの金髪男性が「ま、夜も遅いしともかく寝なさい」ということで、私とパッドさんは裏庭の小屋へ案内されベッドに潜り込んだ。パイロン君とサマンサさんは寝袋を借りてバーのソファで寝ることとなった。なんとも可笑しいな大理古城小旅行の一日目であった。(次号へ続く)



【上】帰省客でこった返す西苑バスターミナル／【下】思いがけない事態で初めて体験した「寝台バス」。左側の換気口の真下したが束の間のマイベッドだった。